

広島市植物公園のおすすめ花菖蒲

当園のおすすめの花菖蒲はなんといっても菖翁花(しょうおうか)。貴重な江戸古花のなかでも別格の花菖蒲です。江戸後期から今日まで連続と受け継がれてきた品種ですが、現在では約20品種が残っているだけといわれています。広島市植物公園は20品種のうち18品種を保有し、菖翁花の保存に努めています。

※菖翁花とは

江戸時代後期、旗本の松平左金吾定朝は、京都西町奉行などの要職についたエリートでありながら花菖蒲の改良に取り組み約300品種を作出し、現在私達が見ることが出来る花菖蒲の基礎を築きました。「花菖培養録」などを著し花菖蒲の文化的価値や芸術性を高めました。彼の作品は門前市をなすと言われるほどの評判となりましたが、基本的に門外不出とされていました。晩年自分のことを菖翁(しょうおう)と称したため彼の作品は、敬意をこめて「菖翁花」と呼ばれています。



1 宇宙(おおぞら、うちゅう)

澄んだ浅黄色地に白筋が入る八重咲の中輪花。数ある花菖蒲の中でも最高峰に君臨する名花。日本に数株しか存在しておらず、目にすることはまれ。



2 王昭君(おうしょうくん)

青紺色の六英の中輪花。王昭君は、中国前漢時代、策略により匈奴に嫁がされた悲劇の美女。その終焉の地は青い城と呼ばれたといふ。この花の色も憂い迄たえた青紺色。



3 七宝(しっぽう)

青紫地に白筋が入る六英の中輪花。七宝は仏教の「無量寿経」などの経典に出てくる金、銀、瑠璃などの7つの貴重な宝石。



4 霓裳羽衣(げいしょうい)

紅紫地に白筋が入る八重咲の中輪花。霓裳羽衣は白楽天の「長恨歌」の一節で、楊貴妃が着ていた輝く美しいドレス。霓は虹のこと。



5 鶴鶴楼(かくじゃくろう)

青藤地に白筋が入る三英の大輪花。鶴鶴楼は王之涣の「登鶴鶴楼」で有名な中国山西省の楼閣。この花の背も高い。



6 蛇籠の波(じゃかごのなみ)

白地に細い紫脈が入る半八重咲の中輪花。この花の紫色の脈が、着物の小紋柄にある、蛇籠に堰き止められた水の流れる模様を思わせる。



7 仙女の洞(せんによのほら)

濃い紅紫に淡い紅紫の細かな紋が入る六英の中輪花。仙女の洞とは仙女がいる洞に迷い込んだ浦島太郎のような男が登場する中国の伝説。



8 鶴の毛衣(つるのけごろも)

純白で三英の中輪花。鶴の毛衣は鶴の羽で織った白い衣装。きりっと立った鋒の姿と、優しい白色に高い品格を感じる。



9 昇竜(のぼりりゅう)

薄紫地に濃紫の脈がかすりが入る八重咲の中輪花。花の終わりに昇天する竜のように、花が三度首を振ると伝えられる。



10 連城の壁(れんじょうのたま)

藤紫地に底白、白筋が入る六英の中輪花。連城の壁とは、秦の昭王が十五の城とても交換したいと欲したほどの銘石。完璧の語源となった。



11 都の異(みやこのたつみ)

淡い藤紫地に砂子紋が入る六英の中輪花。花名は百人一首六歌仙の一人喜撰法師の「我が庵は都のたつみしかぞ住む」の歌から。



12 霓の巴(にじのともし)

赤紫地に底白、白筋が入る三英の垂れ咲き中輪花。白色のずいど筋の模様が霓(にじ)色をした葵巴(あおいともえ)の紋を思わせる。



13 雲衣裳(くもいしょう)

紅紫地に紫の紋が入り、花柱枝が紫の六英の中輪花。花名は李白が「清平調詞」で楊貴妃の美しさを詠じた「雲には衣裳を想い華には容を想う」より。



14 和田津海(わたつみ)

青紫地に白筋、花柱枝が白の三英の小輪花。和田津海は「海神」。古語でワタは「海」を、「ミ」は神を意味する。



15 五湖の遊(ごこのあそび)

青紫地に明瞭な白筋が入り、花柱枝が白の六英の中輪花。菖翁の『花菖培養録』には濃青色の八重咲きで描かれているため異説がある。



16 立田川(たつたがわ)

白地に紅紫色の覆輪が入る三英の中輪花。花名は百人一首業平の「千早ふる神代も聞かず立田川」より。紅紫色が立田川に流れるモミジに見えてくる。



17 笑布袋(わらいほてい)

薄紫地に細い脈が細く入る六英の大輪花。外花被が大きくなり大輪となり、ぼってりした花姿が布袋様のおなかにみえる。



18 酒中花(しゅちゅうか)

白地に紅紫色の覆輪が入る六英の中輪花。江戸時代から栽培されている品種で、昔から菖翁花と言われてきた。江戸椿にも酒中花という品種があり、こちらも白地に赤の覆輪が入る。

註 花菖蒲の花名について

識字率世界一と言われるほど高い教育水準にあった江戸時代、武士は儒学、朱子学の素養が必須であった。そんな武士が育てた花菖蒲には漢詩、漢文、和歌などからの命名が数多くみられ、高い教養を感じる。

註 菖翁花について

菖翁花には諸説があります。また、生育状況により出展できない場合がありますのでご了承ください。

花菖蒲 タイプ別鑑賞のしかた

現在私たちが目にする花菖蒲は、ノハナショウブただ1種から花形や色の変ったものを選抜し改良されてきたものです。改良された地域の気候風土や鑑賞する人の感性によって、以下の4つの異なった花菖蒲のタイプに分類されます。(伝統的に、「～系」と分類されてきましたが、生物学的には同じ系統ですので、ここでは「～タイプ」と表記します。)

① 長井(ながい)タイプ

山形県長井市で栽培されてきた品種群。ノハナショウブの面影を強く残しており、三英花が多く、清楚で可憐、シンプルで飽きの来ない魅力があります。屋外の菖蒲園で群生美を楽しみます。



長井小紫(三英)

他に、郭公鳥(三英)、小桜姫(三英)、爪紅(三英)など

② 江戸(えど)タイプ

江戸時代中期から江戸で育種改良されてきた品種群。屋外での栽培を前提としており、風雨に強く丈夫な品種が多く残っています。江戸庶民の好みにより、スッキリとした立ち姿の「粋でいなせ」な花が愛されました。菖蒲園の八つ橋や土手の上から見下ろす形で群生の美しさを鑑賞します。



日の出鶴(三英)

他に、五月晴(六英平咲)、黒竜の爪(玉咲)など

③ 肥後(ひご)タイプ

江戸の菖翁花をもとに、肥後熊本藩の藩士によって育種改良された品種群。近年まで門外不出とされてきました。一輪の花の美しさを室内で正座して鑑賞することを目的として改良されており、草丈は低く堂々とした威厳のある大輪花が特徴です。花の正面で姿勢を低くして、内花被(銚)のたち具合や芯の見事さを鑑賞します。



業平(六英)

他に、新紫鳳殿(六英)、児化粧(六英)、舞妓(三英)など

④ 伊勢(いせ)タイプ

紀州藩士吉井定五郎によって伊勢松坂で改良された品種群。垂れ咲の三英花のみで六英や八重はありません。花弁に細かい波状の凹凸が入る縮緬地や、雄蕊の先端が細かく切れ込む蜘蛛手など、繊細で女性的な美しさが特徴です。肥後タイプ同様に室内鑑賞目的で改良されており、姿勢を低くして花弁の垂れ具合を鑑賞します。



朝日空(三英)

他に、伊勢路の春(三英)、安濃乙女(三英)、夕霧(三英)など

ハナショウブの花の基本構造

ハナショウブは、日本の山野に自生しているノハナショウブを元に改良された園芸植物です。元のノハナショウブの花の構造は、外花被、内花被、雄ずい、雌ずいから構成されています。外花被は多くの双子葉植物では萼(ガク)に相当する部分ですが、ノハナショウブでは3枚あり、大きくなり垂れて色が付き、花びらのように見えます。また、中心の黄色いブロッチは蜜標(みつひょう)と呼ばれ、訪花昆虫を誘導する役目があります。

一方、内花被は多くの双子葉植物では花弁に相当する部分ですが、ノハナショウブでは3枚あり、銚、耳弁、立弁などと呼ばれ、外花被より小型で立った花びらのように見えます。また、雌ずいは先端が3つに分かれた花柱枝と呼ばれる独特の構造になり、花びらのような色が付くので目立ちます。3本の雄ずいは花柱枝の外側にぴったり沿っています。雌ずいの基部には3室の子房があります。



ノハナショウブの花の構造

三英花と六英花

三英花とは、野生のノハナショウブの花の構造と同等のもので、垂れた花びらが3枚あるように見えるのが特徴です。

一方、六英花とは、3枚の外花被だけでなく3枚の内花被が大型化して垂れたもので、垂れた花びらが6枚あるように見えるのが特徴です。



小町娘(三英)



七宝(六英)